



# 里芋の煮っころがし



こぐまじゅんこ

ぼくの家は、お父さんもお母さんも働いている。

だから、家のことは、おばあちゃんがしてくれている。

部屋は、きれいに片づけてくれるし、ぼくが宿題をするときはそばで、そっと見守ってくれているから、ぼくは、お母さんがいなくても安心していられる。

でも、ただひとつ、ぼくが嫌だなあ・・・、と思っていることがあるんだ。それは、おばあちゃんの作るごはん。

昨日は、さばの味噌煮だった。

おとといは、大根のたいたもの。

なんかこう、和食ばかりで、茶色いんだよなあ。

ぼくが食べたいのは、オムライスとか、ハヤシライスとかそんな洋食なのに・・・。

今日は、学校から帰ると、おばあちゃんは、台所で里芋の皮をむいていた。

「手がかゆくなるから、こうして酢を手につけてむくんじゃ。

そうしたら、かゆくなくなるんだよ。」

って、おばあちゃんは、聞いてもいないことをペラペラとしゃべった。

「里芋の煮っころがしを食べると、ばあちゃんは、秋がきたんだなあ・・・、って思っとうれしくなるんだよ。秋は稲刈りがあったり、祭りがあったり、ばあちゃんの誕生日もあるからね。ばあちゃんは、秋が大好きなんじゃ。」

ばあちゃんは、まだまだペラペラしゃべりつづける。

ぼくは、里芋の煮っころがしなんて、どうでもよかったけど、ばあちゃんがあんまりごきげんだったから黙っていた。

夕食の時間。

茶色い里芋の煮っころがし。

ぼくは、仕方なく、ひと口食べてみる。

ねっとりとした里芋の食感。

甘辛くって、あれ？意外と美味しいかも。

ぼくは、パクパク食べた。

ばあちゃんの秋の味が、ぼくもすっかり気に入ってしまった。